

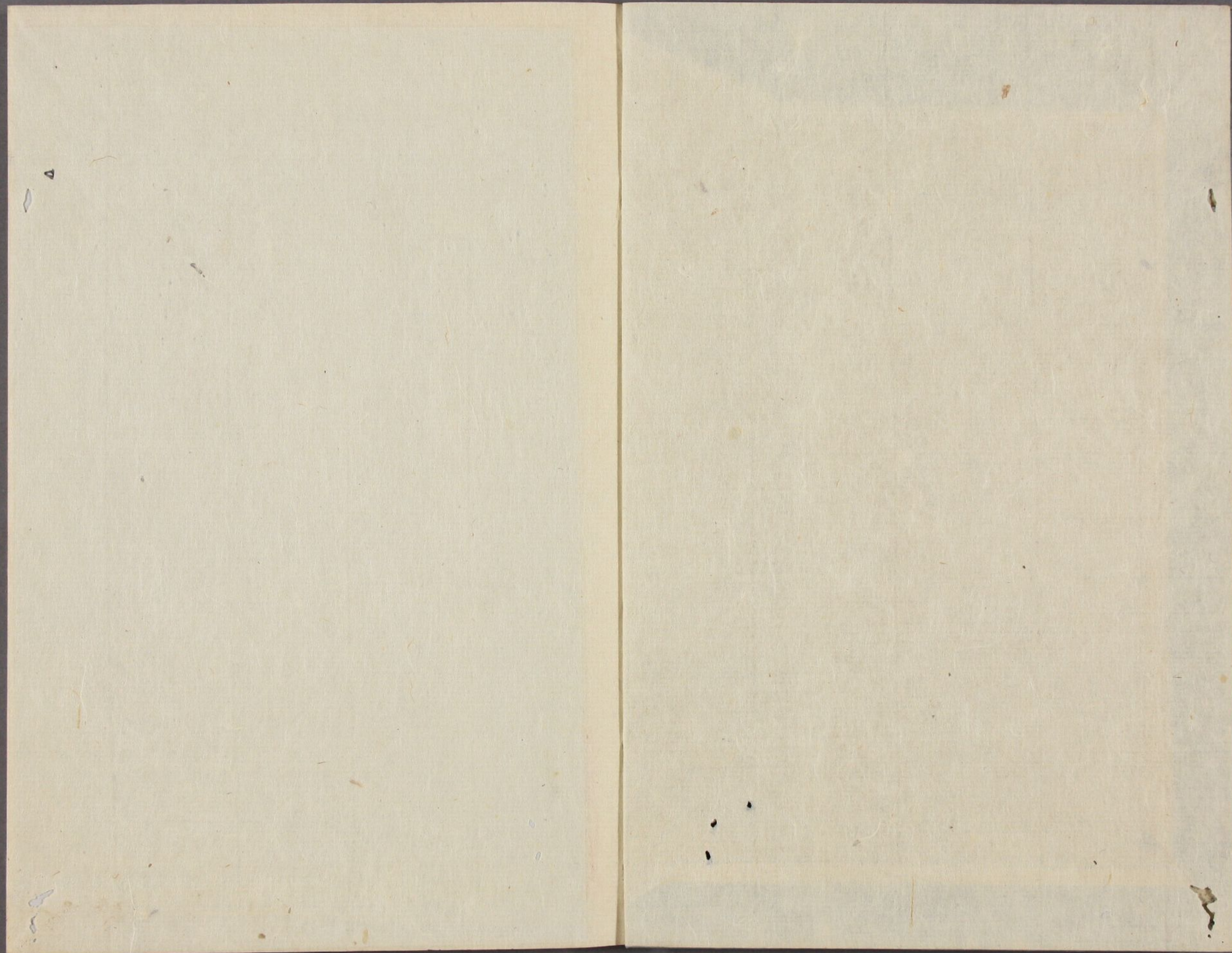


後撰集新抄

秋上

子





後撰和歌集卷第五新抄

秋歌上

惟貞親王の家の奇合是天よ。

よん〜ん



○一本よ。是貞と何の方秘よ。是貞親王ハ光孝第二の皇子なり。此奇合の言古今中も此集よをうく見たり。

尔まのにも風の涼ふきまき〜くゆるなり。金葉秋「何ことほよふく夕暮時風な色と秋立

日こそす〜かりたま。うんな縁なよて。そのをなげよと縁なよま。其古今秋上吹の〜小秋の草木の志を〜んが〜ん山風を〜〜といふ〜んなど皆回ト。

題〜〜文



ふ。

海一

五原業平朝臣

秋の解を大物御
あはれ秋を色どる

あはれ秋を色どる

古今

人を思ふころは木の葉にあはれさかぜのまふくらりも

秋免。 此二篇大和物語よりそをどりの内侍よりいませうけ

そこの次の條はおたのめ侍よ中おすけの時中おのそやみ

よみやりける。秋をぎをらどるゆきま。とありうきま。いし

秋の解をいらどるま。とありうきま。

源昇朝臣。時方うりかよひを。あまの月日ばうりおな

ぬ。あまの月日ばうりかよひを。あまの月日ばうりおな

ど。

つうひはえみまも
とのせりの朝臣。
時方うりかよひ
の月日ばうりおな
ぬ。あまの月日ば
うりかよひを。あま
の月日ばうりおな

くつうしてとん
かこせて侍をば。

なぬあまの月日ばうりかよひを。あまの月日ばうりおな

東。 へうとて。洞とてなるもの。上。中。お。己。よ。り。ま。装束

洞とてとる。く。洞とてなるもの。上。中。お。己。よ。り。ま。装束

よ。洞とてとる。く。洞とてなるもの。上。中。お。己。よ。り。ま。装束

な。洞とてとる。く。洞とてなるもの。上。中。お。己。よ。り。ま。装束

き。洞とてとる。く。洞とてなるもの。上。中。お。己。よ。り。ま。装束

東院

あまの月日ばうりかよひを。あまの月日ばうりおな

○ 思ふまじのすれなるもの。織女よむ。く。て。衣を裁縫おどす。方

のわざを。織女よむ。く。て。衣を裁縫おどす。方

そつえち。棚機女よむ。つ。ち。助。侍。なり。た。織女なり。後世の俗は。七夕と

○ 後撰集新抄五

四

つうじは七月初七日
 日かたかたまでと
 んといひつあけ
 てゆるる人の件か
 雨あつたをさだま
 りていひきけ

を其所^コももきぬきとす也。若葉未^モ茂^シて。其のいとよそくたりあひ
 おきやあまかしん^ハ。おひ^ハらんありのちもきぬきをきぬきをおく
 となげきあま^ハ。おひ^ハらんありのちもきぬきをきぬきをおく
 をきぬきおひ^ハらんありのちもきぬきをきぬきをおく
 さと^ハ。おひ^ハらんありのちもきぬきをきぬきをおく
 いとをきを引^ハらんありのちもきぬきをきぬきをおく
 重^ハらんありのちもきぬきをきぬきをおく

七月七日ふゆ^ハあつたをさだま^ハらんありのちもきぬきをきぬきをおく
 まで^ハらんありのちもきぬきをきぬきをおく

源中^ハ正^ハ

あつたをさだま^ハらんありのちもきぬきをきぬきをおく
 ○一首のま^ハらんありのちもきぬきをきぬきをおく
 といふ^ハらんありのちもきぬきをきぬきをおく

返一
 よこ人あつた

水ま^ハらんありのちもきぬきをきぬきをおく
 ○天のよ^ハらんありのちもきぬきをきぬきをおく
 一^ハらんありのちもきぬきをきぬきをおく
 なり。此二首ハ我中を二星にぞく^ハらんありのちもきぬきをきぬきをおく
 なぬのち日小女のもとおき^ハらんありのちもきぬきをきぬきをおく

源中^ハ正^ハ

織女のお月日を長く恋おはすのよしをいふは、
 織女のお月日を長く恋おはすのよしをいふは、
 なり。織女のお月日を長く恋おはすのよしをいふは、
 も年月おとすも長く経るもよし。天川の縁ふて流るる
 ふせおとハ、此方おありて流るるおとと、お月つぎ
 おおとハ、向の人のあはれと。かくさ方よりいへる
 又新古今 夏 玉子くばともをせよん 新古今 山田お系
 だちとあるなどいさう異なるは、いざいざ方少く、
 せんといふは近づくも、もとのさハ一つなり。三向、
 かりて、あやおむきのてふをもちり、おのれと一つ
 かり、結ぶも、おのれお同く、但し、結べり、何れ
 べき所をも、すといやうおむすべりといふと、玉
 小妻く見たり。もこそそのつらひ、お月も、お月

玉のづゝをぬおく、
 ○万葉十に申す。七夕おあて、三回の句、お月、
 とありて、二星の契を絶ざる物なご、お月、
 色渡りて、た今秋一秋のとなりといふなり。玉
 せん料の枕詞なり。 年おとすといふ、織女の一
 をいふ、同巻、
 月おとすといふ、
 かくて、四向万葉よ、年おとすといふ、
 写誤するにも、
 とりあす、
 次下、
 物をとあるをも、

なせばもやうはとありしやもあるべし。

秋の秋のころもあつとくきねむるはあへることよひきねむるもあつとん

○秋の秋をききそのぞとつふこそきもげふと物然知るやうよ織

女情きひくる今秋ハ不コヨヒ明アケズもあれうとたり。

葵らん云乃葉今をかへしてん年終るうにようねるその誠

○例の我が意のあたり。 昔くんかきうしきまわくきりん節ぐ。整給

ひくるも葉をそそやうへしまわせん今ハ整るかひもねく二

星の一年の間は只一度をぬくなる中になり果るそのをよたり。

初句整々とつふも今ハ整るかひもねくなり果るをり

のすなればまろくとやうよ整給ひたりやうねるが其言葉ハな

どいもんがぬくわざとおがえきたるさかよひひくるものなりけ

数いと多くあつておちろきひやうなりんをつとべし。 さき

は末句よりぬるとあるも。そハなりぬるのなをよ小見誤まれる

の。又きさななどの文字をよ与なると言ハあやまれるももある

べし。 瓊麻呂云は末句誤りハあつと。なれまてよろこつて

し。さハ。年の渡りにづきたるすや。寄ぬる帰ぬるなどの義にて。

成ぬるとつふよ。いんごくも遠きものもとつと。俗言ハ。年ガ寄タと

つと。老ニ成タとつと。因縁なるをも思ふべし。於何もあるんけ

まど。今ふとも思ひおぼといへ。 師云。げふよると云ふハ。つくと

云と回をゆて。秋よなるをねづくともいへぎ。け寄りぬるの説もよ

ろ。かえし。されど又上の。なの誤なりんとの説もすてがし。と

いささし。

七夕をよめる。

○は例も万葉の七夕とのそりて、そもナ又カノヨヒとよむ
 事なる。今にハア子七夕をとあるも織女タタハタをとらまのめくすえ
 て、オーんゆユ。七夕とちて、タナバタとよむ事ハの。こそ七夕
 おとあまーを、後子をハと字張まるゆもあまし。但ーかくて
 毛ナ又カノヨヒとよむ事、記おもあまのひと志り。ナ又カ
 知といへハ。いもんよりち七夕にとりよべけれハなり。万葉
露、詠、などあ
るとも美なり。
子あまもども明録
 天河とよまわハハなハれども、思ひあまを、を年ハにこそあて
 ○は例も万葉十小出なり。思ひあまを、ハ、彦星の母出なり。織女の心
 小なりてよめるなり。遠き渡ハハあまざれども、思ひがたハハ小出

しゆをハ一年かゝりて、待といふ事なり。例も万葉ハハ、
 やあわつせ一とよふあまのびりハのよも思なるなくハ、ハハ、
 ちえもかゝりて、ハハ、ハハ、
 ともあまもハ、ハハ、ハハ、

河まの川、ハハ、ハハ、ハハ、
 ○織女のまて兄長、兄七月七日を待となり。二句つハの辞、ハハ、
 ち居ハハ、ハハ、ハハ、
 あまを以てあまともなるなり。捨ハハ、ハハ、
 かまの波のたらしめさす。

紀ハハ、
 々あまのりハハ、ハハ、ハハ、

まうとなり。

秋とれど川霧^{川子むき}もつる天川^{かそこう}もつる目乃^{むぎ}おわき

○此亦も万葉十にあり。こは織女の。彦星を待なり。日向の万葉子川

亦向^{今并}居而^うと何るを。傳へ候まるとるべし。川上^{川上}とつる。さうも同船

々れどなり。

阿戸の河を飛し。ませふぞ渡ぬる。多岐川^{ひら} 渡お神をぬまはけ

○意しきせむぞ口。意しと思ひつる。看中^{サヤ}にといそんがめし。は教

の河の事。上よ。多岐川^{多岐川} 渡お神をぬまはけ。多岐川の訓文字

委くいへり。多岐川^{多岐川} 渡お神をぬまはけ。多岐川の訓文字

津とつるも同く。万葉にも多岐川^{多岐川} 渡お神をぬまはけ。多岐川の訓文字

よむも。水のたぎら流る。そのなまきなり。これら万葉の假字書お

多難とおぼるべき字を。まはるもせささるべし。

多那をこけ年とはいそど。天河もまわらういざれなん

○抄亦七日をかりと定先ずとも。礼て候んとなり。思ひ着る心

なむしと何う。はをなんんは。彦星のゆふなりといふなり。

されどかゝるも。初向^{初向}なむとのとらゆ。いづかおまゆるなりこそ

例の七夕^{七夕}およめ。己が意奇也。初向^{初向}を織女^{タニメ}のめくとらえなると

し。織女のめく年^年はつらうとまいそ。いさゆか。信てまうんとと

なるべし。日向の雲^雲は。あちわらうといそん料也。未向^{未向}の初るも

縁の詞なり。礼なんきつし。みそ姑もあやぎ。んまかせて物

まらなり。古々^{古々}。意。あはにのまあまばらう。玉の結のたしてん

だまらんたとがまそ。なると同し。

おほし河向躬恒

秋の秋乃長記^{長記}にかきを多那をこまなて。ぬきふこそ思ふべらなま

○後撰集新抄五

○十五

うねのまなへんのとも思ひつまご一本よりけいとまて玉結小
もけいれ方正きすいをいまま正義もはいれりお字なり文章に
云々ともいへ王但多い又くと云ん成べいれれる秋吹風の音
さい今いさいいいふ秘ぞ先せいきん此奇の新古
すめひて志たい一打業て只又のんなるん一とをきけるとんててけ
正義も縣孫大人の書入らまるはもはいい又なり歎息する所子
を詞なりあまさといふこらなりとあまさばもけいれれる秋吹風を見ふべ
いい。物まごもはいれれるのり魔麻呂のりきはの方よりかる屋
きよの説ありいは説も物まごく思ももそは進考よりいへい。
一首のまま秋の物態いわびきい世上の常理ぞといふおおお
がいれれるあけきますかい又いわびく思ももとなり。かいてを

たといへ詞も万葉考別記卷一の「みより」世の山の麓のきけくか為云
くか為當也ともいハ今おも果くて獨秘んやていまを得てまい
ふなり。あいいしくしよりいは三字をはたやと訓つ物まご波るハ果
してい言ぞとすめり。常にいととあるといふま行まく物まご
あまゆて終おといつまをい。さて其果くを本にてい。あまゆまに
も打つけますあまにも轉してい。卷十五今ノ六。ハ可成麻の吟め
る山を城ゆかん日よふや思ふあまいをぞいん。古今新集にいひぬまき
が今はいかなど難波なる身を法といへもあまんとぞあまふ是らを
果くてなり。卷十一今ノ十五。ハ今あまるは違こともあいん吾ゆも小波ハ太
奈於毛比曾念也命いふ終バ古今集子。郭の初て。ほとぎん吟を
きけるゆらきぬくぬ一定ぬ意せるはいはらハ打つけ小とん

さぐありてつまじくかひいせん^一きりく^二く^三長^四ケレを
畧^一り。玉^二枝^三五の^四苞^五サ^六葉^七以下^八を^九見^{一〇}て^{一一}よく^{一二}わ^{一三}き^{一四}ま^{一五}ふ^{一六}べ^{一七}し。

よみ人^一あ^二ら^三ば

目^一ぐ^二ろ^三の^四赤^五き^六く^七か^八く^九手^{一〇}ね^{一一}む^{一二}し^{一三}名^{一四}子^{一五}の^{一六}人^{一七}を^{一八}思^{一九}ふ^{二〇}ら^{二一}ろ^{二二}の^{二三}都^{二四}

○目^一ぐ^二ろ^三も^四ね^五ま^六も^七と^八ら^九に^{一〇}夕^{一一}方^{一二}に^{一三}鳴^{一四}け^{一五}る^{一六}虫^{一七}の^{一八}赤^{一九}を^{二〇}す^{二一}て^{二二}虫^{二三}の^{二四}情^{二五}を^{二六}催^{二七}

し^一る^二を^三上^四下^五に^六け^七て^八お^九ま^{一〇}き^{一一}夕^{一二}言^{一三}れ^{一四}と^{一五}結^{一六}と^{一七}を^{一八}き^{一九}か^{二〇}せ^{二一}う^{二二}な^{二三}

る^一古^二今^三を^四よ^五は^六お^七も^八よ^九の^{一〇}か^{一一}ろ^{一二}目^{一三}ぐ^{一四}ろ^{一五}の^{一六}鳴^{一七}く^{一八}ゆ^{一九}ら^{二〇}れ^{二一}を^{二二}

な^一ら^二ち^三ま^四つ^五れ^六つ^七。 く^一す^二の^三又^四の^五一^六年 も^一美^二は^三一^四年^五又^六一^七年

○今^一昔^二の^三鳴^四く^五を^六す^七く^八に^九い^{一〇}れ^{一一}も^{一二}よ^{一三}憂^{一四}き^{一五}り^{一六}あ^{一七}ら^{一八}う^{一九}て^{二〇}鳴^{二一}る^{二二}る^{二三}な^{二四}ら^{二五}う^{二六}の^{二七}

秋^一の^二夕^三べ^四を^五誰^六も^七の^八所^九に^{一〇}あ^{一一}ら^{一二}ず^{一三}て^{一四}憂^{一五}き^{一六}り^{一七}あ^{一八}ら^{一九}う^{二〇}か^{二一}ら^{二二}な^{二三}れ^{二四}ば^{二五}と^{二六}り^{二七}の^{二八}

ふ^一て^二目^三ぐ^四ろ^五の^六鳴^七を^八す^九て^{一〇}我^{一一}の^{一二}憂^{一三}き^{一四}り^{一五}あ^{一六}ら^{一七}う^{一八}て^{一九}思^{二〇}ひ^{二一}や^{二二}ら

する^一な^二ら^三べ^四し。 一^一年^二に^三末^四句^五秋^六と^七ある^八方^九も^{一〇}こと^{一一}ふ^{一二}く^{一三}す^{一四}也^{一五}誰^{一六}も

秋^一を^二抱^三の^四う^五き^六時^七節^八な^九ま^{一〇}き^{一一}ば^{一二}と^{一三}を^{一四}な^{一五}れ^{一六}ど^{一七}なり。 四^一句^二美^三本^四子^五抱^六也^七と

ある^一方^二ハ^三お^四と^五べ^六し。

秋^一風^二乃^三ふ^四き^五く^六る^七ふ^八ひ^九を^{一〇}き^{一一}り^{一二}く^{一三}其^{一四}葉^{一五}の^{一六}根^{一七}で^{一八}や^{一九}に^{二〇}赤^{二一}み^{二二}づ^{二三}れ^{二四}け^{二五}り

○一^一首^二秋^三を^四ハ^五の^六り^七かな^八ら^九。 き^一り^二く^三き^四ハ^五和^六名^七抄^八子^九蟋^{一〇}蟀^{一一}一^{一二}名^{一三}蒼^{一四}里^{一五}本^{一六}本^{一七}

と^一あ^二り^三て^四つ^五ら^六ま^七さ^八せ^九と^{一〇}な^{一一}く^{一二}と^{一三}り^{一四}よ^{一五}の^{一六}な^{一七}ら^{一八}。 蒼^一本^二万^三葉^四集^五秋^六風^七ハ^八不^九こ^{一〇}ろ^{一一}び^{一二}ぬ^{一三}ら^{一四}し^{一五}一^{一六}首^{一七}

カ^一ン^二ナ^三ゴ^四と^五も^六り^七へ^八り^九秋^{一〇}の^{一一}初^{一二}の^{一三}う^{一四}ら^{一五}時^{一六}小^{一七}鳴^{一八}け^{一九}る^{二〇}ら^{二一}う^{二二}。 や^一く^二な^三ら^四な^五る

小^一ち^二が^三か^四ひ^五て^六人^七の^八身^九も^{一〇}家^{一一}中^{一二}床^{一三}の^{一四}下^{一五}など^{一六}も^{一七}入^{一八}ま^{一九}を^{二〇}な^{二一}く^{二二}す^{二三}詩

の^一幽^二風^三 七^一月^二小^三七^四月^五在^六野^七八^八月^九在^{一〇}宇^{一一}九^{一二}月^{一三}在^{一四}戸^{一五}十^{一六}月^{一七}蟋^{一八}蟀^{一九}入^{二〇}我^{二一}床^{二二}下^{二三}と^{二四}何

ふ^一ら^二ぬ^三し^四彼^五の^六鳴^七の^八き^九り^{一〇}と^{一一}す^{一二}ゆ^{一三}ら^{一四}に^{一五}う^{一六}を^{一七}き^{一八}り^{一九}く^{二〇}す^{二一}と^{二二}ハ^{二三}名^{二四}を

あふささる小やあらん。若菜万葉子。かろづの羽風を寄る。促織の
管子クダすく着れきり。とさるとあるもや。似ゆるすけり。万葉子。蟋
るも。若古保呂本とよむべき。一。縣飛入人のいもれ。ふよりて。
蟋蟀をこころぎとのとよむ。とよむ。か。よれ。毒くハ。若解花
十の上。兄え。を。切。き。えて。さ。と
ふべ。い。ず。れ。が。い。ふ。ハ。ま。ぶ。り。

我あくものやかろ。たまり。す。草のやどりに。た。ず。なく

○詠をわかなう。古今上。秋。林の秋のわらも。た。なく。む。我が

ごと。お。や。想。か。ろ。ん。初。め。は。一。句。草のやどりに。い。へ。ふ。を。

我が。薄の。若。ふ。と。ら。と。さ。う。あ。る。さ。を。思。い。て。い。へ。る。に。も。あ。る

んか。

こんと。い。ひ。い。ち。ど。や。さ。ぬ。林の。秋。の。思。い。の。想。い。き。

○正。句。一。本。子。作。す。む。の。と。あ。れ。ど。も。そ。を。保。た。う。そ。な。う。を。一。首

との。ま。げ。一。首。お。を。ま。か。れ。る。所。な。し。朗。詠。集。子。今。こん。と。作

たの。免。々。ん。林の。秋。を。何。う。一。首。つ。ね。中。の。なく。

我。の。一。本。林の。思。ふ。ま。や。ど。る。人。も。お。も。ほ。え。む。誰。を。ま。り。む。い。ら。ん

○き。や。ど。る。ハ。ま。て。あ。る。な。り。お。も。ほ。え。む。不。覺。と。さ。ふ。を。く。

ら。ハ。数。多。く。凝。連。な。る。や。う。お。を。ま。か。れ。る。保。た。う。を。キ。リ。ニ。と。さ

ふ。追。し。初。句。ハ。一。本。我。高。ふ。と。あ。る。方。ま。さ。う。て。ま。す。ゆ。れ。ど。も。こ。を

又。の。一。本。あ。る。林の。思。ふ。と。あ。る。方。ま。さ。う。て。ま。す。ゆ。れ。な。り。と。ハ。す。ん

か。ろ。古。今。上。秋。の。思。ふ。ま。や。ど。る。人。も。お。も。ほ。え。む。誰。を。ま。り。む。い。ら

こ。ろ。な。く。ん。こ。ら。と。い。ひ。詞。を。く。あ。と。も。万。葉。子。数。計。こ。き。い

と。も。こ。ろ。な。く。そ。こ。な。く。そ。こ。ら。な。ど。も。ま。て。何。ま。も。お。の。数。多。き。ま。さ。ふ

て。い。さ。う。づ。の。ま。い。あ。り。巨。等。の。字。書。と。あ。る。の。誤。な。る。子。ハ。契

きつつかちけり。

○秋とよ切て大輔が云こと公得べし。下の初初も此秋の初

書あり。又合すべし。大輔ハ保明親王の侍乳母少く。但馬守

源多すく女といつり。ち秦秦らうまさハ京二條通の西由て

洛外なり。此所を禹都ウツ萬佐といふ初初のゆハ。姓氏録左京諸蕃

上。漢の部。太秦公宿禰の條も見えて。古事記傳二十三卷三亦引出て

ことふ委くいされり。草本などハ女をさへハ。そち

る紙をたみまげて。枝などふ。まをげめを挿挿るを云。つけ

てといふも似するゆなぐ。それを紙紙より西てもあるも

結び付するを云と。縣長大人いされり。

左大臣

山ざとの物さびーきはを鏡の葉たなびくごとを思ひやうあり

○我鳥のけ萩の葉のけ葉の秋風ふ。まをそくなびくのいとさびーき

多びごとふ山里をさか加いと。そゆまの思ひやらうくもよと

なり。ち秦ハ京遠き所ハあねど。城外なれど。山里とハのこま

ひーなり。すべて山里とハ。別業山莊など錢つゆ。山里といひな

る。

題あり

小野道風朝臣

ほふ出がい出がぬいの小かせがりー茶落身を秋風ふすまやまをそく葉ー

○抄ハ。ちに出ぬハ。幸ぬなり。世小身をうんとて。捨やせんと思へ

ど。何とゆくうらうらに。花落も枝も出。秋風も吹ひふなりて。ふと思

ひ催されてよめるふなる人しとあり。げ小下。向身を秋風ふとある

